

惣助峠

早田・二榎

絵：野口宣友



東長田の二榎から上長田の早田を越す峠は「惣助峠」と呼ばれています。なぜ、この峠には人の名前が付いているのでしょうか。

天文3年の秋、赤谷に住む猫師の権兵衛さんは、愛犬の五郎丸と一緒に狩りに出かけました。権兵衛さんが鹿や猪を追う内に、どんどんと早田の山林へ入って行く中、突然身体が動かなくなり、山の中で倒れてしまいました。犬の五郎丸は主人が苦しんでいるのを見て、助けを呼ぼうと急いで山を駆け下りました。

その頃、日も暮れようというのに狩りから戻ってこない権兵衛さんを心配した家族や近所の村人が二榎に集まっていました。そこへくたくたになった五郎丸が駆け込みます。村人たちは五郎丸を見て権兵衛さんの危機を知り、捜索隊を組んで山奥へと権兵衛さんを助けに行くことにしました。村人たちは五郎丸の後について、権兵衛さんの倒れている場所に向かいました。

すると途中、山中の断崖から祈祷の声が聞こえてきました。村

人が不審に思つて断崖に近づくと、岩窟で修験者が一心に祈っていました。村長がこんなところでなにをしているのか尋ねると、修験者は「私の前にこの山の成仏できない若い霊が現れ、この住処に入った者を祟つてやった」といのです」と護摩を焚きながら答えました。

それを聞いた村人たちはもしやと思ひぞつとしました。修験者にくわしく話を聞くと、霊は「山桜の樹の根元」を掘れと告げたと言います。村人たちが霊の言うように山桜の根本を掘ると、「九輪」と思われる丸い墓石が出できました。よく見ると石には「俗名木村惣助」「文明十七年六月十五日」という文字が刻まれています。村人たちは、権兵衛さんは墓の主に祟られてしまったのだと考え、墓を建て直し、ねんごろに供養しました。すると、倒れたままだった権兵衛さんが意識を取り戻し、五郎丸や家族は無事を喜びました。

さて、墓の主の「木村惣助」には、文明十七年、一体どんな事件が起こったのでしょうか。当時鎌倉山にはお城があり、戸田安房守

森重という殿様が一带を治めていました。殿様の小姓を勤めていた16歳の木村惣助は、ある日殿様の命令で手間にある峯松城の城主浅野家へ密書を届けることになりました。惣助が無事に密書を届け終え、城へ帰るために早田の峠を越そうとすると、そこに同じ城に勤める上役の次席側用人の山中三左衛門が待ち伏せしていました。三左衛門は度胸もよく、日頃から殿様のお気に入り、惣助を疎ましく思っていたのです。三左衛門はやおら惣助の前に躍り出て「恨み思い知れ！」と刀を抜いて斬りかかりました。突然のことに惣助はなす術もなく斬り殺されてしまいました。それ以来、無残に殺されてしまった惣助を偲んで、峠を「惣助峠」と呼ぶようになりました。無残に殺されてしまった惣助の霊は嘆き悲しみ、この峠に近づくと者を恐れさせました。権兵衛さんは惣助の霊気によって倒れてしまったのでした。

村人たちの供養の後、たたりはなくなり、惣助峠には今も大きな墓が建っています。おしまい